

小学6年 国語「私と本」「ぼくのブックウーマン」

ねらい

物語の内容と、自分の生活や読書経験を結び付けて考える。

学習展開（5時間）

マイプラン形式の単元

1. 主人公の背景を理解し、話の設定をつかむ
2. 主人公の気持ちや考え方の変化を読む
3. 1人の登場人物を選び、その人物にとって
「本とはどんなものなのか」を考える。
4. 自分にとって読書とはどんなものか、振り返って
言葉にまとめてPOPにする。
5. 推敲する。



「飛ぶ教室」 エーリヒ・ケストナー

私にとって本は「心の熱くなる世界」だ

本はいちばん身近にある。「新しい気持ちに出会える場所」だ。
早く起きた日の朝は、テレビの音もない静かな部屋で本を読む。
表紙をめくれば、本への扉が開いて一気にその世界へ入ることができる。
まるで自分がその場にいるかのように夢中になれる。
これも本の魅力の一つかもしれない。

私が特に、心の熱くなった本は、エーリヒ・ケストナーさんが書いた児童文学「飛ぶ教室」。
ドイツの寄宿学校で暮らす、5人の少年たちが、「クリスマス祭」で披露する劇の準備や練習を
しながら、様々な事件を乗り越え、成長していく物語だ。

特に私は、5人が仲間に対してかける言葉に、すごく心が動かされた。
なぐさめる言葉、やる気を出すときに使う言葉、それに、言葉を発しなくても、強い決意を胸に
するときもあった。

だからこそ、心の底から「面白い」「助けたい」と思えたのだ。
読む本一冊に、またちがう世界があり、どういう風に心が熱くなるのかは変わる。
でもそれも、本の楽しめるところだと思う。

それが、私にとっての本だ。【松任小学校6年 〇〇】

指導のポイント

- ☆2学期当初から、何度かブックトークをすることで、
ゴールのイメージや、見通しを持つ。
- ☆物語の設定を読み取り、主人公の気持ちや考え方
の変化を読む過程に丁寧に取り組むことで、
「登場人物にとって本とはどんなものなのか」という
難しい問いに取り組む足掛かりとする。
- ☆複数の人物から、自分で考えたい人物を選び、
「本とはどんなものなのか」を考えることで、
「自分にとって」を考えるヒントとする。
- ☆図書館に掲示することを伝え、意欲を高める。

学校図書館との関わり

- ・本を紹介するとはどういうことなのか、自
分にとって本とはどのようなものなのか参
考のために、学校司書から「私にとっての
本」「ファンタジー」「外国文学」のテーマ
で朝の時間に3回ブックトークをした。
- ・作成した「私にとっての本」のPOPを
松任図書館に展示を依頼した。